

【講義 2】くずし字について

なかにしさとこ
中西智子

一、はじめに

この講義では、日本古典籍を取り扱う上で必須の教養である「くずし字」について、基礎知識の概説と、初歩的な課題による読解練習を行う。

「くずし字」は、古典籍や古文書などの前近代の資料にみられる文字表記であるが、資料の時代、ジャンル、個人によってくずし方の差異が大きく、その解読の方法も、表記の種類によって異なる。この講義では、「くずし字」習得の第一歩として、「あ」から「ん」までの四十八の変体仮名（平仮名のくずし）を中心に読解練習を行う。加えて、読みたい資料に合わせた辞典・教材類の活用法について解説する。

（過去 5 年の担当教員：恋田知子、岡田貴憲、糸汐里）

二、くずし字とは

文字資料のうち、楷書^{かいしよ}の点画^{てんかく}を省略した手書き文字、そして手書き文字をもとにした版本の文字のことを「くずし字」という。

書道史では点画の省略段階を「草書^{そうしよ}」「行書^{ぎょうしよ}」等に区分するが、歴史学・日本文学・書誌学の研究分野では、それらを包括的に「くずし字」と総称する。なお書道史研究の対象外とされやすい近世文書や古典籍の文字については、明確な区分が存在しないことから、「くずし字」という用語がそのまま一般的に使われている。

「くずし字」は古典籍や古文書などの表記に用いられてきたが、明治時代以降、金属活版印刷の普及や仮名字体の統一に伴って衰退した。その後の例として残るものとしては、速記性・秘匿性を求められる手書きの書簡類や、デザイン性を求められる看板類などがある。

三、くずし字の特徴

1) 変体仮名

「くずし字」には、現行の標準字体の仮名に加えて、それとは異なる字体の仮名＝変体仮名が多く用いられる。変体仮名とは、明治 33 年（1900）の「小学校令施行規則」で採用されなかった仮名で、古典籍や古文書を読む上で必須。それぞれの仮名の元となった漢字を「^{じ ぼ}字母」という。

2) 漢字の省略、異体字・俗字

漢字の「くずし字」は、^{かいしよ てんかく}楷書の点画を省略した「^{そうしよ}草書」「^{ぎようしよ}行書」で書かれるほか、通行の字体とは異なる^{いたい じ}異体字・^{ぞく じ}俗字をしばしば用いる。点画の省略方法には、一定の法則があり、時代・地域・個人単位で特徴がみられる場合も多い。

3) 連綿体、踊り字

「くずし字」には、二字以上の文字を続けて書く^{れんめんたい}連綿体（つづけ字）や、同じ文字や語句を繰り返すときに用いる「ㄣ」「ㄤ」「々」「ゝ」「ノ」「＼」（くの字点）などの^{おど じ}踊り字とよばれる繰り返し符号が頻出する。

連綿体は一字ずつの区分が困難な場合もあり、「^{もうし そうろう}申 候」「^{ごぎ そうろう}御座候」などの敬語の定型句は、省略の大きな連綿体になる場合がある。

また踊り字は連綿の中に紛れることも多く、ともに注意が必要。踊り字は、漢字（々々）・平仮名（ゝ）・片仮名（ゝ）と符号が使い分けられているが、資料によっては、その使い分けが曖昧な場合もある。

四、くずし字の読み方

1) 漢字と仮名を判別する

くずして書かれている文字が、漢字なのか仮名なのかを判別する。その手がかりとして、変体仮名の字母^{じ ぼ}を覚えることから始める。変体仮名の字母は全部で 322 種あるが、その中でも使用頻度の高い字母 150 種（48 音×約 3）をまずは習得する。

2) 前後の文章から文字を類推する。

読めない文字があっても、文脈をおさえながら、最適な読みを試みる。

古典籍の場合、読み始めは活字化された本文を参考にしながら読むと、その本の表記の特徴を捉えることができる。

特定の地名や人名などは、判別が難しいため、地名辞典や人名辞典を活用する。

3) 清音と濁音の判別

基本的に古典籍の表記では、文字に清濁の別がついていない（稀に濁点などが付いている資料もある）。濁点「゛」や半濁点「゜」は文章の前後で判断して、解読する側で読むこととなる。同じ語でも時代によって清濁が異なる場合があるため、時代別の辞書などで確認する。

参考文献

【辞典・字典】

・児玉幸多『くずし字解読辞典 普及版』東京堂出版、1979 年 *起筆順検索

◎児玉幸多『くずし字用例辞典』東京堂出版、1981 年 *崩し方が段階的に説明

- ・笠間影印叢刊刊行会編『字典かな一写本を読む楽しみー』笠間書院、2003 年

＊古今の名筆

- ・江守賢治『草書検索字典』三省堂、2007 年
- ・法書会編『五體字類 改訂第四版』西東書房、2014 年 ＊楷・行・草・隸・篆

〈異体字・俗字を読む〉

- ・日外アソシエーツ編集部『漢字異体字典』日外アソシエーツ、1994 年

〈資料の時代・ジャンルごとに読む〉

- ・林英夫監修『新編 古文書解読字典』柏書房、1993 年 ＊江戸時代～明治初期
- ・波多野幸彦・東京手紙の会『くずし字字典』思文閣出版、2000 年
- ＊自筆書状の用例。筆者別の用例、巻末に筆者略伝も。
- ・根岸茂夫『江戸版本解読大字典』柏書房、2000 年
- ・林英夫監修・柏書房編集部編『入門 古文書小事典』柏書房、2005 年

＊戦国期～明治期

- ・かな研究会編『実用変体がな』新典社、1988 年

＊カタカナのくずし字。仏書解読に。

〈意味を調べる〉

- ・中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典』角川書店、1982—1999 年
- ・上代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典』上代編、三省堂、1967 年
- ・室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典』室町時代編、1985—2001 年

【教材】

- ・駒井鶯静『古典かなの知識と読みかた』東京美術、1984
- ・吉田豊『寺子屋式古文書手習い』柏書房、1998 年

- ・ アダムカバット『妖怪草紙—くずし字入門』柏書房、2001 年
- ・ 吉田豊『寺子屋式古文書女筆入門』柏書房、2004 年
- ・ 吉田豊『寺子屋式続古文書手習い』柏書房、2005 年
- ・ 油井宏子監修・柏書房編集部編『古文書検定 入門編』柏書房、2005 年
- ・ 兼築信行『一週間で読めるくずし字 伊勢物語』淡交社、2006 年
- ・ 兼築信行『一週間で読めるくずし字 古今集・新古今集』淡交社、2006 年
- ・ 田代圭一・山中悠希・和田琢磨編『変体がなで読む日本の古典』新典社、2016 年
- ・ 飯倉洋一編『アプリで学ぶくずし字 くずし字学習支援アプリ KuLA の使い方』笠間書院、2017 年 *アプリ・Web サイト
- ・ 油井宏子『くずし字辞典を引いて古文書を読もう』東京堂出版、2019 年
- ・ 「みんなで翻刻」国立歴史民俗博物館・東京大学地震研究所・京都大学古地震研究会
<https://honkoku.org/>
- ・ 同志社大学古典教材開発研究センター編『未来を切り拓く古典教材 和本・くずし字でこんな授業ができる すぐに使える問題付き!』文学通信、2023 年 3 月
>全文ダウンロードサイト
<https://bungaku-report.com/kotekiri.html>

【翻刻をさがす】

- ・ 市古貞次・大曾根章介編『国文学複製翻刻書目総覧』正・続 日本古典文学会、1982—1989 年
- ・ 国書データベース>国書所在>【複】
<https://kokusho.nijl.ac.jp/?ln=ja>
- ・ 国文学・アーカイブズ学論文データベース> 〈翻刻〉or 〈翻〉で検索
<https://ronbun.nijl.ac.jp/kokubun>

てふ／＼

第二 蝶々

な

一 てふ／＼てふ／＼。菜の□にとまれ。

さくら

なのは□あい□ら。櫻にとま□。

さくら

櫻の□なの。さかゆるみよ□。

とまれよあそべ。あそべよとまれ。

二 おきよ／＼。ねぐら□すづめ。

あさひ

朝日のひかりの。□しこぬさ□に。

ねぐらをいで。こず□にとまり。

あそべよすづめ。うたへよすづめ。

第二 蝶々

一 てふ／＼てふ／＼。菜のなにとまれ。

なのはふあい／＼。櫻にとまれ。

櫻のななのさかゆるみよ／＼。

とまれよあそべ。あそべよとまれ。

二 おきよ／＼。ねぐら／＼すづめ。

朝日のひかりの。しこぬさ／＼。

ねぐらをいで。こず／＼にとまり。

あそべよすづめ。うたへよすづめ。

幼稚園唱歌集

二 文部省

問題 1 次のくずし字を読んでみましょう。

問題 1 こたえ

てふ／＼

第二 蝶々

な

一 てふ／＼てふ／＼。菜の**は**にとまれ。

さくら

なのは**に**あ**いた**ら。櫻にとまれ。

さくら

櫻の**は**なの。さかゆるみ**よに**。

とまれよあそべ。あそべよとまれ。

二 おきよ／＼。ねぐらのすづめ。

あそび

朝日のひかりの。**さ**しこぬ**さき**に。

ねぐらをいで。こず**ゑ**にとまり。

あそべよすづめ。うたへよすづめ。

第二 蝶々

一 てふ／＼てふ／＼。菜の**者**。

なのは**多**く。櫻に**連**。

櫻の**者**のさかゆるみ**耳**。

とまれよあそべ。うたへよとまれ。

二 おきよ／＼。ねぐら**能**。

朝日のひかりの**左**に**起**。

ねぐらをいで。こず**恵**にとまり。

あそべよすづめ。うたへよすづめ。

幼稚園唱歌集

二 史部省

問題 2 次のくずし字を読んでみましょう。

左京大夫道雅

今
絶

人



問題 2 こたえ

左京大夫道雅

盤堂

於毛比

今はたゝおもひ

奈武

絶なむ

登者可里

とはかり

遠

を

徒天

人つて

奈良天

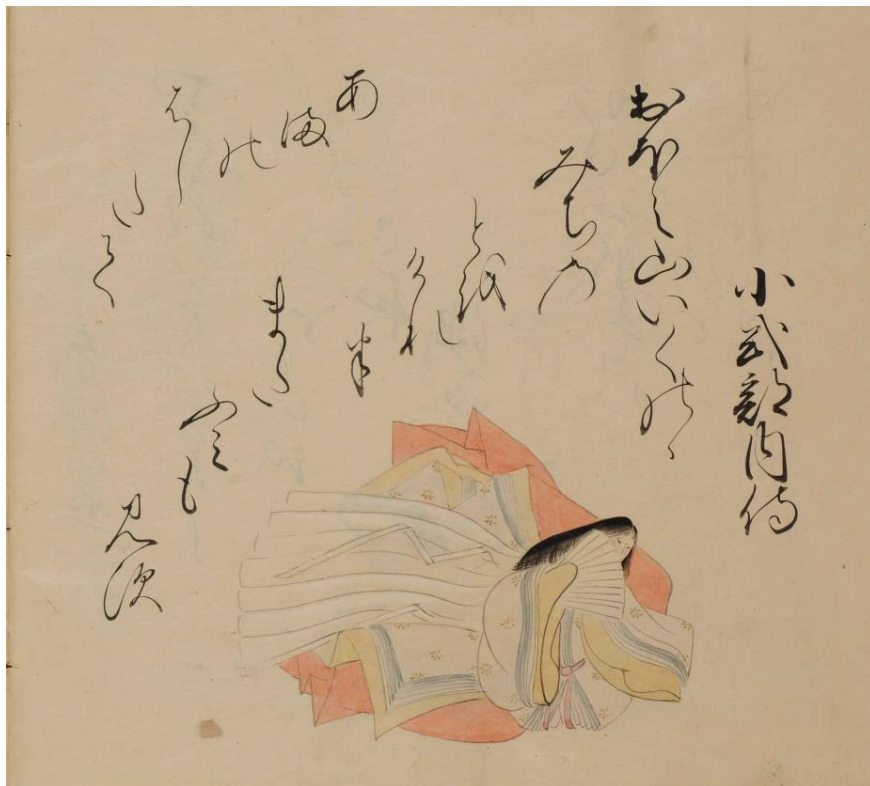
ならて

以不与之毛可那

いふよしもかな



問題 3 次のくずし字を読んでみましょう。

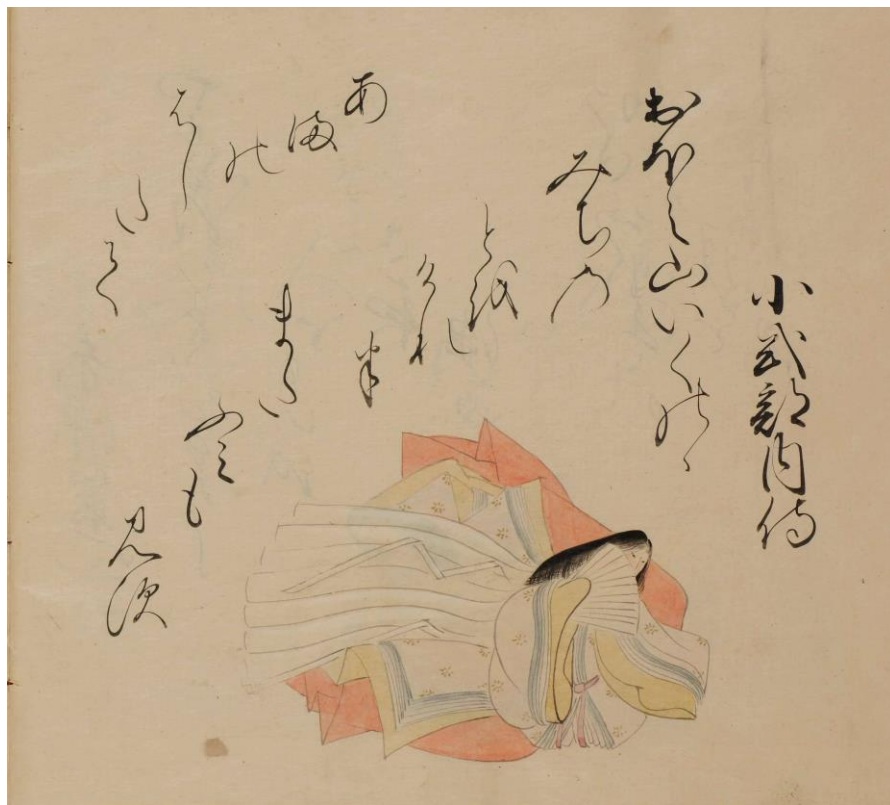


国文研蔵『百人一首』
(夕2―279)

小式部内侍

問題 3 こたえ

国文研蔵『百人一首』(タ2-279)

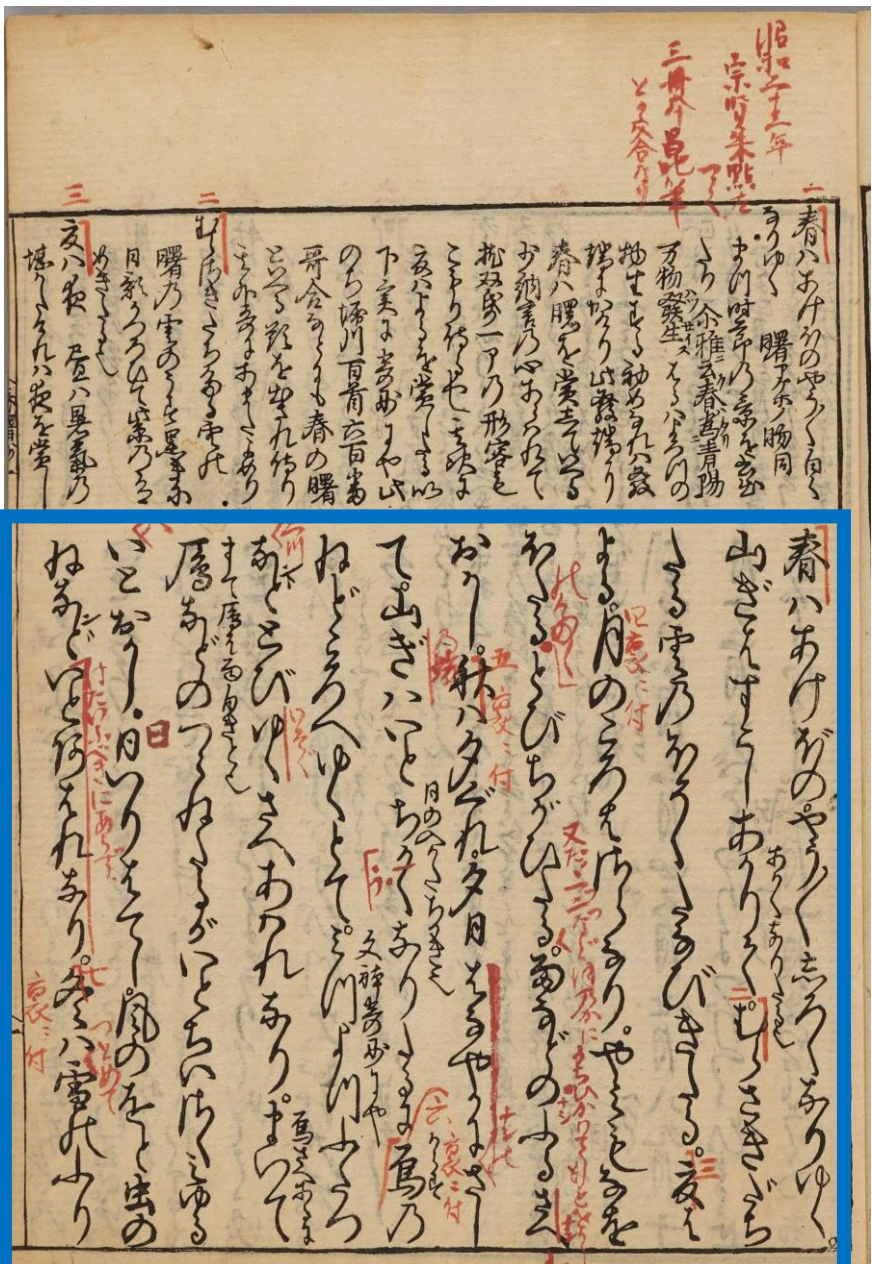


安あ 満ま 能の 者之は 多た 天て
 於本衣 以久能々 小式部内侍
 おほえ山いくの、 美知乃 美ちの 止越 とを 介礼 けれ 半は 末多 また 不三 ふみ 毛も 見す 須

問題4 次のくずし字を読んでみましょう。

(青枠内のみ・注記および赤字の書き入れ等は省略)

春はあけ□の。やう／＼□ろく□りゆく。
山ぎ□すこしあ□り□。む□さき□ち
□る雲□□そく□なびき□る。夏□
よる。月のころ□□らなり。やみもなを
□□るとびち□ひ□る。雨などのふるさへ
お□し。秋□タぐれ。夕日□なや□□さし
て。山ぎ□いとち□く□りたる□鳥□
ねどころへゆくとして。み□よ□ふ□つ
なととびゆくさへあ□れ□り。まいて
雁□どのつらね□る□いとちい□くみゆる
いとおかし。日いり□て、。風のをと虫の
ね□どいと□□れ□り。冬□雪のふり



問題 4 こたえ

(青枠内のみ・注記および赤字の書き入れ等は省略)

本 志 奈

春はあけぼの。やう／＼しろくなりゆく。

者 可 天 良 多

山ぎはすこしあかりて。むらさきだち

多 乃 本 多 者

たる雲のほそくたなびきたる。夏は

者 佐

よる。月のころはさらなり。やみもなを

本 多 可 多

ほたるとびちがひたる。雨などのふるさへ

可 八 者 可 尔

おかし。秋は夕ぐれ。夕日はなやかにさし

八 可 奈 尔 乃

て。山ぎはいとちかくなりたるに鳥の

川 川 多

ねどころへゆくとて。みつよつふたつ

八 奈

なととびゆくさへあはれなり。まいて

奈 多 可 佐

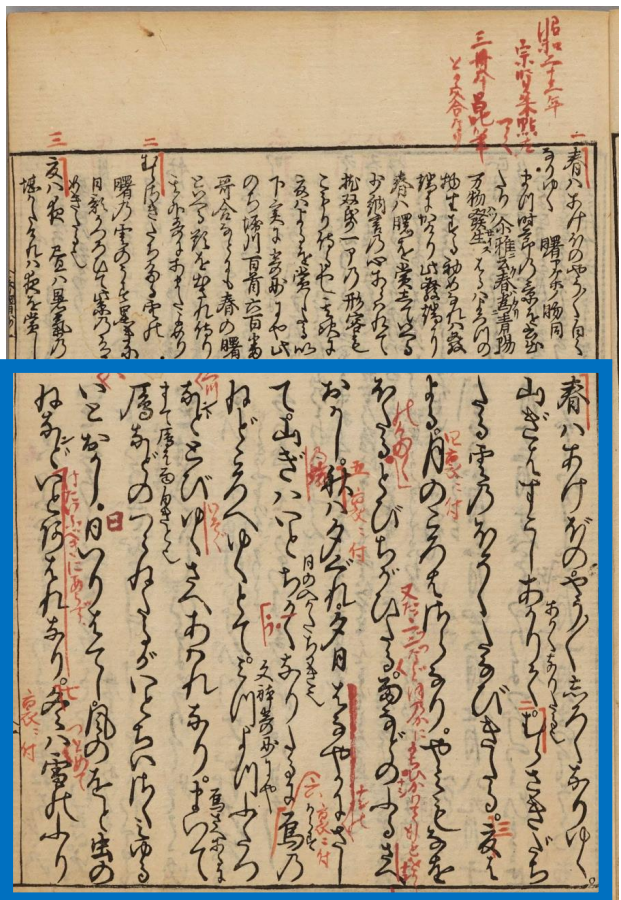
雁などのつらねたるがいとちいさくみゆる

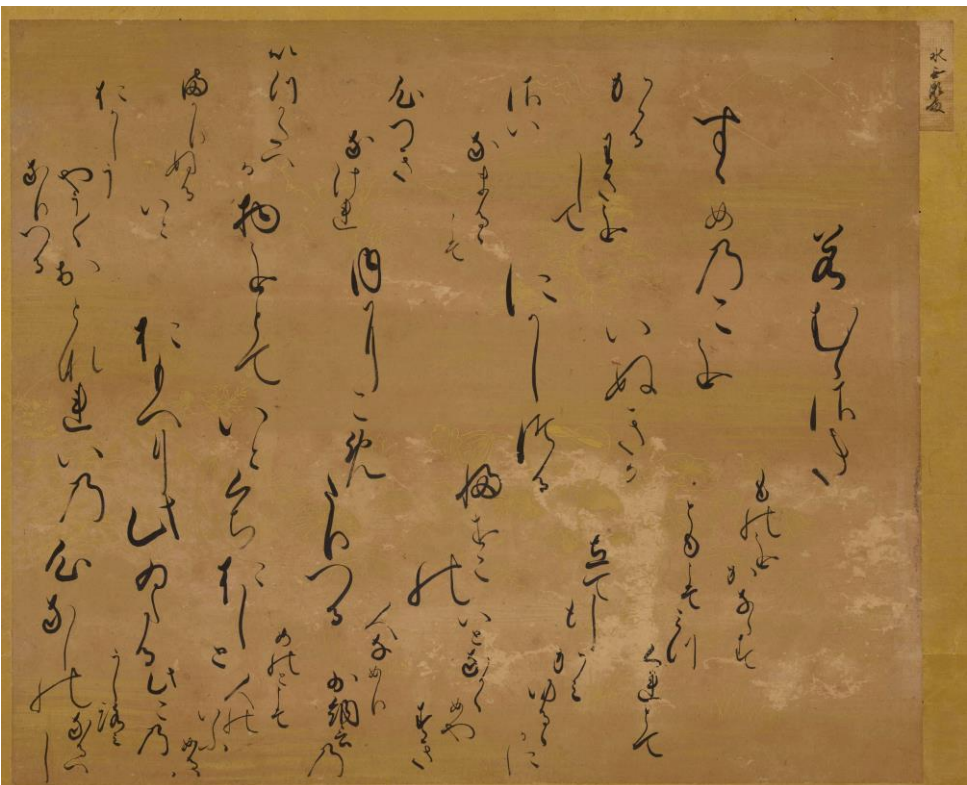
者

いとおかし。日いりはてゝ。風のをと虫の

奈 阿 者 奈 八

ねなどいとあはれなり。冬は雪のふり





問題5 次のくずし字を読んでみましょう。

問題5 こたえ

かゝる
わさを
して
さい
なまるゝ
こそ
心つき
なけれ
いつかたへ
か
まかりぬる
いと
おかしう
やう／＼
なりつる

若むらさき 良佐
すゝめのこを 乃
いぬきか 徒

にかしつる 婦世

ふせこ 能

の

内にこめ 耳免

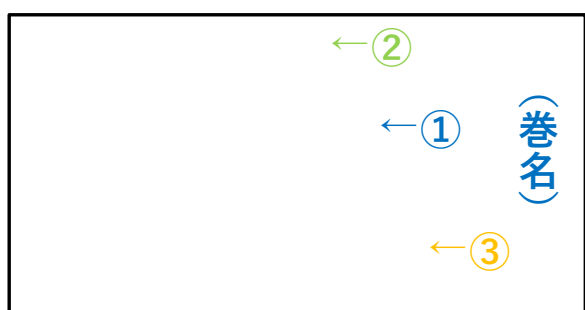
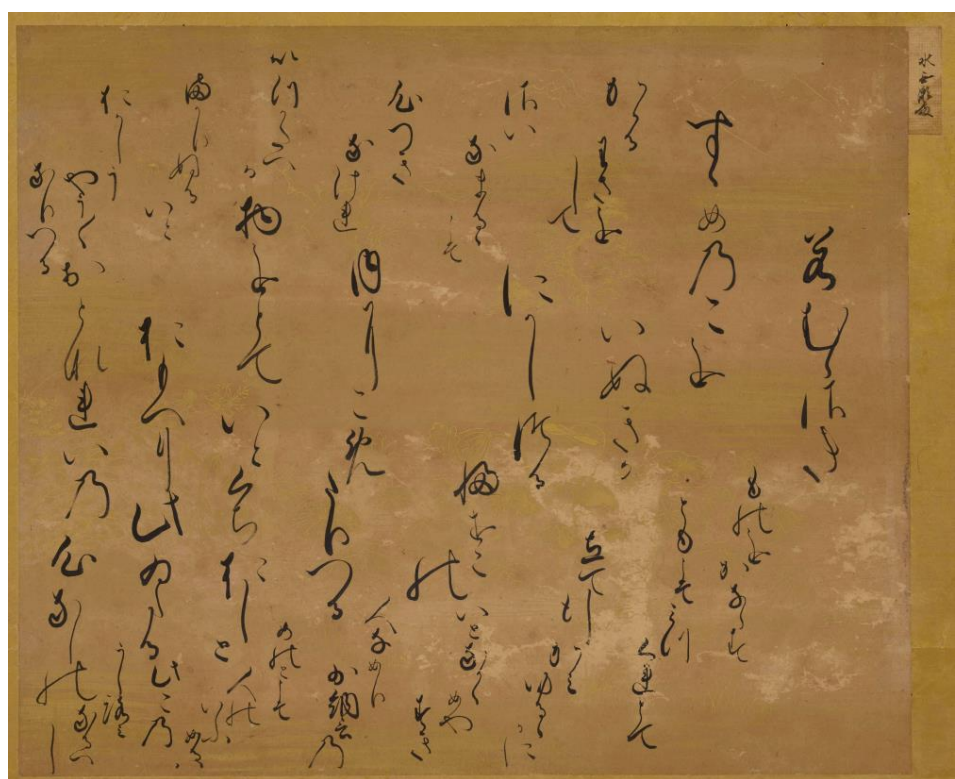
たりつる 多

物をとていとくちおし 於

おもへり此みたる 於 居多

おとなれの心なしの 連 乃 能

ものを
かならず
こともこそみつ
くれとて
立て行かみ
ゆるゝ
かに
いとなく
めや
すぎ
人なめり
少納言の
めのとゝそ
人の
いふ
めるは
此この
うしろみ
なるへ
し



問題 6 次のくずし字を読んでみましょう。

ごめん申さんの文字 もんじ

たてがみ

か

きん

あ

やくしや

の



国文研蔵『女要珠文庫』（岩津90-127）

か

ごめん申さんと

いふ

文字

京江戸大坂三
御ひやう

の

の

の

※絵の中にも文字が隠れています。

問題 6 こたえ

ごめん申さんとの文字
もんじ

たてがみ

す(春)かた(多)

きんね(祢)んの(乃)

あた(多)り(里)

やくしや
の



国文研蔵『女要珠文庫』(岩津90-127)

かた(多)ちを

ごめん申さんと

いふ

文字に(尔)てつくりたり

京江戸大坂三が(可)のつ(津)の(乃)

御ひやうは(者)ん